

しらおか歴史物知りシート

No.2-4

こもれびの森・歴史資料展示室

【板碑のはなし】

13世紀前半から、16世紀末頃までに造られた石製の塔婆を「板碑」とか「板石塔婆」と呼びます。また、長瀬周辺で産出する緑色片岩（緑泥石などを多量に含む結晶片岩の総称）で造られたものが多いことから「青石塔婆」などと呼ぶこともあります。

板碑は現在の卒塔婆と同様、死者の冥福を祈る追善や、供養者自身の死後の安楽を祈る生前供養のために立てられたもので墓石ではありません。

埼玉県内には約5万基の板碑が残されているといわれます。市内では、伝世資料として135基、発掘調査による出土資料として40基、合計175基が確認されています（令和4年4月現在・破片資料を含む）。

板碑はなぜこれほどたくさん作られたのでしょうか？

板碑の歴史 板碑は、五輪塔から転化したものといわれます。最古の資料は、熊谷市須賀広にある、嘉禄3年（1227）銘のものです。熊谷市の江南地域には、これに次ぐ安貞2年（1228）銘、寛喜2年（1230）銘などの資料が所在し、板碑の発地域を考える上で重要な地域と見ることができます。

ごく初期の板碑は、大里郡域や北埼玉郡域、北足立郡北部地域などの荒川中流域に多く見られる傾向があります。少し遅れて、比企郡域の都幾川、入間川流域に広がり、1300年頃には県内全域で確認されるようになることが知られています。

市内で最も古い資料は、岡泉丸山共同墓地にある弘安9年（1286）銘のものです。続いて実ヶ谷内田家の正応2年（1289）銘（市指定文化財）のもの、入耕地館跡出土の正応2年銘のものなど、13世紀末の資料がみられます。

板碑造立のピークは、県内全体を見ると1360年代となりますが、市内の紀年銘のわかる資料のピークはこれよりやや早く1300年～1350年代で11基を数えます。その後1400年までが9基となり、この期間に全体の半数を超える資料が造られていることがわかります。

常設展示に使用している資料は、入耕地館跡出土の資料で文和4年（1355）銘のものです。これは、観応2年（1351）から翌3年にかけて鬼窪氏が「観応の擾乱」に出陣した3年後に当たり、入耕地館跡の年代観を非常によく示す貴重な資料だとみることができます。

最も新しい資料は、市内では下野田折原家の享禄5年（1532）銘のものです。県内では戸田市の慶長3年（1598）銘のものといわれています。

板碑の形態 板碑の形態は、頭部を三角形に整え、2条の溝が刻まれ、梵字種子（仏教の諸尊を古いインドの文字の一種で現したもの）や図像で主尊とする阿弥陀如来、大日如来、釈迦如来、地藏菩薩、観音菩薩などや脇侍を表現し、その下に偈（仏の教えや仏教の諸尊をたたえる言葉）や願文（施主の願を表す言葉）、紀年銘などが刻まれているのが一般的です。このほかにも、天蓋や花瓶、三具足と呼ばれる



実ヶ谷内田家の正応2年（1289）銘の板碑

仏具などが描かれるものもあります。

板碑は、九州から北海道まで全国各地に分布しますが、関東地方に多く見られる板碑は緑色片岩製で、美しい緑色と薄く加工しやすいという特徴をもちます。細かい彫刻が施しやすいこともあり、美術的にも優れたものが数多く見られます。このような特徴を持ち、かつて武蔵国と呼ばれた埼玉県や東京都、神奈川県の一部を中心に広く確認される板碑を「武蔵型板碑」と呼んでいます。

縄文時代以降、ヒスイなど緑色の石材を珍重する傾向は強く、緑色片岩は、石棒、石剣など祭祀系遺物に多用されてきた歴史があります。そう考えると、この石が中世の人々に好まれたのも肯げます。

板碑と信仰 板碑に込められた信仰は、偈の出典の經典や主尊から知ることができます。関東地方のものは8割まで浄土信仰に基づくものといわれますが、宗派まで特定することは一般的にはできません。ただ例外的に、鎌倉時代末期以降に多くなる「南無阿弥陀仏」の名号を刻む時宗系と、「南無妙法蓮華經」の題目を刻む日蓮宗系については宗派を知ることができます。

板碑は15世紀後半以降、とくに関東地方では、月待や庚申待などの民俗行事に伴って農民たちが結縁（仏法と縁を結び将来の成仏を願うこと）して供養塔を造立する例が多くなります。極楽往生はもちろんで

すが、作物の実りなど現世での利益を祈る民間信仰の行事に合わせて板碑が立てられるようになったと考えられます。このように、板碑を造立する階層や契機など、社会の移り変わりに応じながら板碑の性格も変化していったことが窺われます。

武蔵武士と板碑 板碑の造立者は、鎌倉時代には武蔵七党などとよばれるような在地領主層がほとんどだと考えられます。初期の板碑は、武蔵武士の館などがあった本拠地や彼らが信仰した寺院周辺に見られることが多く、武士の名前が刻まれているものもあるからです。浄土信仰を背景に地域の有力者である武士たちが板碑を造立したためでしょう。

世情が乱れ、戦に明け暮れる生活を余儀なくされた武蔵武士たちも、世の中の平和や心の安寧を渴望していたのです。その証が5万基にのぼる板碑だということです。

洋の東西を問わず、争いごとがなく、一人ひとりが大切にされる世の中であって欲しいと切に祈ります。



主な梵字種子



板碑各部の名称 (正福院応永15年・1408銘板碑)